In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『琉館筆譚』翻字、注釈
Author	岩本, 真理
Citation	人文研究. 64 巻, p.179-196.
Issue Date	2013-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	衣笠忠司教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第64巻　2013年3月　179頁～196頁

『琉館筆譚』翻字、注釈

岩　本　真　理

本稿は『琉館筆譚』の内容を紹介するものである。江戸時代薩摩藩の支配下にあった琉球国からの使者との交流により、薩摩藩は琉球や清国の最新情報を知りえた。琉球側が清の冊封使を受け入れる際の具体的な方法や福建琉球館での琉球人の暮らしなどもこの記録からその一端を知ることができる。本稿は現在伝わる二本の写本（ハワイ大学ホーレー文庫本、筑波大学本）の異同を明らかにした上で、注釈と訳文を加える。石塚崔高と楊文鳳が残したこの資料は、果たして純粋の筆談であるのか、口頭での談話を文字に起こしたものであるのかという問いが生ずる。本稿はこの資料には口語性の語彙が大量に含まれることから、石塚による整理により半文半白の文体へと編集されたとの説を提示する。

0　本稿の目的

現在、ハワイ大学ホーレー文庫に所蔵される『琉館筆譚』は、享和3年（1803年）に琉球の使者・嘉味田親雲上（ペーチン）経斎（中国名　楊文鳳）が、薩摩に設置された琉球館において、薩摩藩士・石塚崔高の訪問を受け、この時に交わした対談の記録である。本稿はこの資料に標点を加えて翻字し、訳と注を施す。その後、史実との符合という側面と、筆談記録に含まれる当時の口語の反映という面から初歩的な考察を加える。

先ず、対談した二名について簡単に記しておく。

石塚崔高は、薩摩加世田の生まれの郷士で唐船の漂着の多い土地柄でもあり、幼い頃から唐通事としての研鑽を積んだ[1]。島津重豪の命を承け、文化11年（1814年）に出版された『南山俗語考』の編者の一人であることで知られる。後に藩命により昌平黌へと派遣されるが、楊との対談は、江戸出仕以前のことである。一方の楊文鳳は、琉球を代表する漢詩文の作者として知られ、冊封使李鼎元の信頼も篤かった。日本には寛政8年（1796年）大宜見王子朝規を正使とする慶賀使節の一員として訪れたことがあり「江戸登り」に参加している。この『琉館筆談』が示す薩摩での石塚との対話はこの数年後のことである[2]。なお、ついでながら、島津重豪は、「江戸登り」の使節の接待には、自ら中国語を用いたことが知られている。琉球側には、装束や振る舞いにも中国風であることを求めており、薩摩側が、琉球の背後にある中国との交流を顕示する機会として「江戸登り」を利用していたとみなしえよう。

本資料『琉館筆談』は、楊が福建に赴いた際の見聞や、台湾に漂着した折の体験と現地側の

対応、首里での子弟教育の実施状況や、最高レベルの官吏である三司官の選出方法にも話が及ぶ。

なお、本稿が使用した写本はハワイ大学ホーレー文庫本の複製本で、法政大学沖縄文化研究所に所蔵されているものである（以下、ホーレー文庫本と称する）。複製本の複写は許可されず、2008年12月11日に筆者が法政大学で閲覧し、書き写した記録によって翻字する。残念ながら書写時には十分に点検する時間がなく、誤写や誤読の可能性が多分にある。

後に、筑波大学図書館での『琉館筆談』の所蔵が確認できた（以下、筑波本と略称する）。この写本は現在デジタル資料として公開されている。この異本は最終葉、最終行に「文化戊辰十一月借抄石塚崔高稿了」とあり、1808年の筆写であることを明示する。石塚から直接借覧して筆写したという。石塚本人の手元に残されていた資料を反映するもので極めて貴重であるが、句点の切り方においては、明らかな誤りが散見する。例えば「甚是熱鬧」を「…甚、是熱鬧」と断句するのは、石塚の語学力からすればありえない誤りである。筑波本の句点の誤りは、石塚自身の記録の誤りというよりも、筆写者、あるいは後に点を加えた読者が、漢文の句読、さらには近世中国語の語彙・語法に不案内であったことを露呈している。

二本の相違は、句点の位置にとどまらない。まず、冒頭部分の作者名が異なっている。

ホーレー文庫本

琉館筆譚

日本　石塚崔高

中山　楊　文鳳

筑波本

琉館筆談

薩州　石塚崔高

筑波本は石塚本人の備忘録の体裁をとっているせいか、対談相手の名を記さず、また日本ではなく、薩州とのみ記す。更に最終葉にも異同がある。

ホーレー文庫本

會栖遲亭日、楊問曰「一老先生坐上頭者為誰。」曰「長谷川養、亦係本州學校教導官員。有足疾。不出門。」

筑波本

會栖遲亭日、楊問曰「一老先生坐上頭者為誰。」曰「長谷川養、亦係本州學校教導官員。有足疾。不出門、養病於家。今日欲與足下相見、肩輿來會。」

ホーレー文庫本は、十数字の脱落があるが、「不出門」が最終行であるため、それ以降は落丁した可能性もある。筑波本には記録の漏れはなく、石塚自身の手元に残されていた資料をほぼ襲っているとみられる。また別の箇所であるが、筑波本のみ、<違う>という意味で「不是

不是」と二回繰り返し、実際の会話場面を彷彿とさせる体裁を見せている。口語性の反映は、筑波本により顕著である。そもそも、この資料が、筆談記録であるのか、会話録であるのかの問題については、後に考察を加える。

1　書誌

ホーレー文庫本　19葉［0002-0020］　毎葉9行　罫なし　横16.5cm　縦24.5cm
筑波本　　9丁　左右双辺10行墨罫紙　横15.0cm　縦22.0cm

2　翻字の体裁について

・本稿の翻字に当たっては、ホーレー文庫本と筑波本の二本を対照し、筆者の解釈により、句点と引用符号を加える。

・エピソードにより八つの部分に区分する。①由来、②自己紹介、③冊封使との交流、⑤福州の琉球館での見聞、⑥琉球国での最高官の選出方法、⑦琉球における子弟教育、⑧薩摩藩士との交流

各エピソードの長短はとりどりであるが、各エピソードごとに葉、行を記す。まずホーレー文庫本、次に筑波本の葉、行を載せる。

・注記は本文末に一括して載せる。注には二本の字句の異同を示すものと、内容や事績に関する注がある。後者は、訳文部分への注記とする。なお、本資料の特徴として、中国の制度に関わる用語を借りながら、薩摩、琉球の制度を紹介する記述がしばしば見られる。訳文では、薩摩、琉球の制度に即した用語により記述する。

・「余」、「餘」などの字体の相違は、基本的にホーレー文庫本によっている。

・原文の割注は、翻字では＜　＞により記す。

・それぞれの発言は「　」で記し、発言者の名が原文で明らかでない箇所は、訳文で補う。

・筑波本にのみに見られる字句は斜体字で示し、訳文内も斜体字による。

・口語的な語彙・語句には下線を加えて示す。

3　翻字と訳文

①由来［2葉　1行目～7行目］［筑波本　1葉　表　1行目～7行目］

『琉館筆譚』

日本　石塚崔高
中山　楊　文鳳

楊君文鳳、琉球首里人也。今年癸亥夏復来此土。石崔高訪其旅館、一見如舊、於是以其相贈答詩什及其筆談語録為一巻、題為琉館筆譚、以誌奇遇於[3]後日也、其詩又別為一冊。

[訳]

楊文鳳は琉球首里の人である。今年（享和3年、1803年）夏に薩摩の地を訪れた。石塚[4]が薩摩に設営された琉球館[5]に楊を訪ねたところ、初対面でもあるにもかかわらず、旧知の間柄のように意気投合し、詩を贈りあった。筆談の記録を『琉館筆譚』としてまとめた。この奇遇を後世に伝えるためである。なお詩は別に一冊を編ずる[6]。

②自己紹介［2葉8行目～ 3 葉7行目］［筑波本　1葉　表　8行目～裏　6行目］

石曰「大名遠著、久慕高風、天假良縁、幸獲識荊為慰、實染晩生、姓石塚、名崔高、自稱次郎左衛門、職係國学生員、碌〻駑才、不足為高明道也。聞足下中山碩徳、重望学、通經術、又善属詩文、特来請教[7]、幸不鄙棄為感。」

楊曰「今過貴地、亦聞足下名、欲見之。念未嘗忘也。今日恵然見顧、何喜如之。多蒙錯愛、辱承下問。慚愧實多。鳳既海外小儒、無經術、又不知文也。少年時曾学作詩、于今荒蕪已久。雖然為知己者、不敢不献醜也。」

[訳]

石塚「ご高名はかねがね承っております。今回ようやく念願かない、若輩者の私にお会いいただきまして、何より感激しております。私は石塚崔高、また次郎左衛門とも申します。薩摩藩の藩学で学ぶ者でありますが、才能乏しく何も傑出したところがございません。貴下が中山きっての碩学で、経学に通じ詩文にも長けておられるとお聞きしております。是非ともご教授いただきたく馳せ参じました。浅学非才の私に面会をお許しいただき、誠に光栄に存じます。」

楊「このたび薩摩の地を訪れましたが、私も貴下の名声を伺っておりましたので、是非お会いしたいと思っていました。この思いは忘れたことありません。今日ここにお運びいただき喜びに堪えません。過分なお言葉に恐縮いたしております。もし私に何かお尋ね下さることがおありでしたら、お恥ずかしいことではございますが、謹んでお受けいたします。私は国外から来た浅学非才の身で、学問もなく、文も満足に作れません。若い頃には多少詩に親しみましたが、今はその才も枯れました。とはいえ、すでに貴下とは知己の間柄となりましたので、勇気を出して、拙作を披露させていただきます。」

③冊封使との交流［3葉9行目～ 6 葉9行目］［筑波本　1葉　裏　7行目～3葉　表　5行目］

石問曰「前年冊封天使、在貴國時、足下作何等官職。曾與正副両使相見、不知其人有才学否。」

楊答曰「正使姓趙名文楷、副使姓李名鼎元、又有僧寄塵者。皆有学術、兼能詩文。鳳在琉球官階為察侍紀四品官。毎見天使極見厚待、當天使臨國時、無本職。初天使未見文鳳前、一日遊

臨海寺、見壁上題詩、乃拙稿也。因而召見琉球自正議大夫以上各貴官、見天使問起居、皆叩頭、天使或揖或拱、答之而已。至如見鳳、輒下階迎接、扶至上坐、待之如賓。鳳惶懼固辞曰『恐得罪於天使、以辱吾王體面。』趙君笑曰『見君固不以官也、特以同学為交也。請勿恠也。』談笑如舊相識。」

楊曰「副使李鼎元、年五十五歳、少於文鳳一歳。毎呼為兄、甚見敬禮。」

石曰「見天使言語通否。」

楊曰「鳳不知華音、有天使帯来通事通話、然以其不甚明暢、一日換之以筆、寫字為問。文鳳亦寫字為對。天使笑曰『悔不早、請管城子傳言、其通快利便、不可言也。』自是以後、筆語以為常、當筆語時、天使等下筆千萬言、即成字ゝ句ゝ明ゝ白ゝ。鳳為對語渋筆遅、或至舉筆、沉吟半晌、汗出浹背。」

石曰「天使曽見足下窓稿為批評否。」楊曰「一日呈詩稿請益。」答曰『余不知詩也。然聞学作詩不如多讀書。』

楊曰「天使有帯来花箋長二丈余、上下装之以閃緞、使鳳寫拙作百首於其上、寫完以呈。趙君見而謝、其不錯一字[8]。」

石曰「天使在館時、昨何等事過日。」

楊曰「除寝與食外、端坐讀書、別不見有一事。」

［訳］

石塚「先年[9]冊封使が貴国に来られた時に、貴下はどのような職を務められましたか。正副使とは以前にお会いになったことがありましたか。学問のある方でしたか。」

楊「正使は趙文楷、副使は李鼎元、さらに僧侶寄塵も同乗していました[10]。いずれも学があり詩文にも秀でた方です。私の琉球での階位は察侍紀四品官です。冊封使にお会いするたびに大変な厚遇を受けました。冊封使が琉球にお越しになる時にはこの職階ではありませんでした。私がお二人にお会いする一日前に、冊封使は臨海寺で過ごされ、臨海寺で壁に掛けられた詩をご覧になりました[11]。実はその詩は私の作品です。翌日、琉球の正議大夫以上の高官を全員召見され、冊封使は我々の生活ぶりなどをお尋ねになりました。皆が叩頭の礼を行うと冊封使は揖の礼を返されるだけでした[12]。私の姿に目をとめられると、すぐに殿上から降りて来られ、私の体を抱き起こして上席に座るように促されました。まるで客人としての扱いです。私は恐縮し『冊封使様に失礼なことをしては、我が琉球国王の体面を傷つけます。』といって固辞しましたが、正使の趙様はにっこりとして『貴下を高官とはみなしていません。同学として接しているのです。どうか悪く思わないでください。』と仰いました。その後、旧知の間柄のように話がはずみました。」

楊「副使の李鼎元は五十五歳で私より一歳年下です[13]。私のことをいつも『兄』と呼び、礼儀を尽くされました。」

石塚「冊封使とは言葉が通じましたか。」

楊「私は中国語ができません。冊封使に同席している通訳を介して会話をしましたが、それでもはっきりとは理解できなかったのです。ある日、冊封使はこのやりとりを筆談に換え、私も文字で書かれた質問に、文字で答えました。冊封使は笑いながら、『もっと早くこうするべきでした。役人にお伝えください。筆談がこんなに便利だったとは。』と答えました。これ以後は、筆談が常となりましたが、筆談では、冊封使達は一旦筆を手にすれば、何千何万という語が一気に迸り出て、たちまち文章ができあがり、その内容も明瞭です。ところが、私は筆談で答えようにも、一向に言葉が浮かばず、呻吟の末にようやく筆をとるようなありさまで、全く冷や汗ものでした。」

石塚「冊封使は貴下の詩稿に批評をしてくれましたか。」

楊「ある日、稿をお見せして批点を加えていただくようお願いしたところ、『私は詩には不案内ですが、詩を作るには多読するのが何よりです。』と答えられました。」

楊「冊封使は美しい模様いりの便箋を持参しています。長さは二丈以上あり、上下は美しい緞子で仕立ててあります。冊封使は、私に詩を百首作って、そこに認めるよう命じました。書き上げて手渡しますと、趙正使は目を通して、一文字も間違っていないと褒めて下さいました。」

石塚「冊封使は、琉球滞在中何をしているのですか。」

楊「寝食以外は、端坐して読書に耽るぐらいで、特に何もなさいません。」

④臺灣への漂着［7葉1行目～ 12葉2行目］［筑波本　3葉　表6行目～ 5葉裏2行目］

石曰「聞舊年貴舟欲往福州、因風不順、漂到台灣有之乎。願聞其詳。」

楊曰「正身如命、本國二隻貢船在那覇、一同開駕、在洋遇風、一隻船于今未知存亡下落。鳳等船漂至台湾地方、船即破矣。所載公私貨物悉為烏有。通船八十名、遇土人出来救命[14]、方得上岸、寫字通意。始知其為台湾也、艱難萬状、不可形容也。其地官員分付土人、借屋居住、得免飢渴、文鳳賦詩謝恩。先是地方官、待鳳等、甚是輕賤、叩頭禮拝而不肯為答禮、及見其地方官或秀才等、以詩與鳳相為贈答。皆下坐答拜、前倨者、後皆恭也。鳳竊謂同舟者『誰道文章不値錢。今日方見文字値錢的。』衆人皆笑[15]。台灣贈答詩載在別冊。」

一日在台灣新荘公分府、旅思凄愴、口占一詩、貼于座隅。地方諸官群来見之。自是敬禮甚篤。一日出外間、遊縣中、上人争先来迎[16]、或有出詩稿求和、或携花箋求書字。鳳毫不推辞、各應其求即答。所過館驛土人、求書甚多。後来不能悉應、或書字到夜深、或送酒肴、或携管弦来慰。凡経過地、往ゝ如此。有僧佛祖年十六、秀才謝鴻恩[17]、年十八、皆好文字。日夜出入旅館、起居安慰、情意甚歓。留十餘日。従至竹塹分府、相去十餘里。其両人跟隨来、如前欵待。其地府官奉政大夫吉壽者、北京人、清朝今上皇帝親眷也。即日来館慰労、談話之間、即席賦詩[18]、一章以献[19]。府官見而賞之。袖而歸、次日遣其子、寄賦次韻詩。并見惠美酒一罈、又次日遣其孫、贈以好茶。在此間、府官一家三人、毎来慰問、其孫年方十四、容貌秀雅、常従十

多個人、乗一座大轎来。叫我寫字。不幾日自此起程。東行西轉、至台灣城。一日城中衆官集于大守正堂[20]、有謁見之禮。大守姓日慶、名日保。其日坐堂上、問[21]鳳等道『琉球海外小邦、而今被中華風教、至於文字亦頗有通之者』。顧左右取筆硯来、面試鳳出班、對日：『海外遠人不識禮數、敢不献醜、以謝高恩。』即書七言律詩以呈。慶保見之、賞文鳳以詩集一函、親事對聯、及衣服等物。此飄流之一二也、事不能盡述也。」

［訳］

石塚「昨年貴下の船が福州へ向かう際、台湾に漂着されたそうですね。詳しく教えていただきたいのです。」

楊「ではお望みをかなえましょう。琉球国から福州にむけた貢船として二艘の船で那覇から出航しましたが、沖で風に見舞われ、一艘は今も行方がわかりません。私達が乗った船は台湾に漂着しましたが、船は大破し、積載していた貢物も私物も全て失いました。乗っていたのは八十名で、地元の民がやってきて全員岸に上れました。筆談でようやくそこが台湾だとわかりました。そこでの苦労は筆舌に尽くしがたいものでした。当地の役人の命令で、土民の家を借りうけ、飢えを凌ぎました。私は詩を作りその御礼としました。最初地方官は私達のことを見下しており、こちらが叩頭の礼をしても、返礼をしません。その後、その地の官吏あるいは秀才にお会いして、私と詩の贈答をするようになると、皆が礼を返すようになりました。当初は傲岸不遜だった者が、後には恭順な態度に変わったのです。同船の人達とこっそりこんな話をしました。『文章なんて一銭にもならないなんて言うなよ、今日初めて文字の有難みがよくわかった。』これを聞いて皆大笑いしました。台湾での贈答詩は別冊に収録しています。」

「ある日台湾の新荘公分府の役所におりました時、異境での辛い思いが詩となって、口をついて出てきました。座の隅にその詩を貼りつけたところ、官吏達が一目見ようと大勢やってまいりました。これ以降、その態度は極めて礼儀正しくなりました。またある時、外を出歩くと、上人が私の所へどっと押し寄せて、詩稿を差し出して『この詩に和してください』と求める者や、持参した便箋に『一筆お願いします』と頼む者が引きも切らなかったのです。私はその求めに快く応じました。足を止めた館駅で出会った土民からの求めは、書を残してほしいというものが非常に多く、後には全ての求めには応えきれなくなりました。深夜まで書を認めておりますと、酒の肴を届ける者、慰みにと管弦の奏者を連れてくる者もおり、およそどこでもこのようなあり様でした。中には、僧侶で、ある宗派の祖師となっている十六歳の青年、十八歳の秀才の謝鴻恩がおり、二人とも書を好み、日夜宿泊先に出入りしては、交流を深めました。滞在は十数日に及びましたが、竹塹分府への移送が決まり、そこは十里以上離れた場所であるにもかかわらず、二人とも私達に随行し、これまでと同様に歓待してくれました。当地の府官、奉政大夫、吉壽[22]という人は北京の人で今上皇帝の親戚にあたる方です。その地に到着するとその日のうちに、慰労に来られました。歓談中に、詩を作っ

て献呈したところ、府官はこれを見て賞賛し、袖中に納め帰宅されました。翌日その息子が父の命を受けて訪れ、私の詩に自ら次韻した詩を寄贈されただけでなく、さらに美酒一甕をお恵み下さいました。また翌日にはその孫が銘茶を届けて下さいました。この間、府官ご一家の三名の方に連日お越しいただいたのです。孫はまだ十四歳、眉目秀麗で、従者を十数人引き連れ、立派な駕籠でやってきて、『書を書いて下さい』と私に依頼しました。それから数日もたたないうちに、この地を離れ、あちこちを経由して台湾城にようやく到着しました。ある日、城内の官吏がこぞって太守の正堂に集い謁見の礼が行われました。太守は名を慶保[23]といい、その日堂上で私達に尋ねます。『琉球は海外の小国ではあっても、今では中華の文化に染まり、文字に至っては通じあうと聞いている。』従者に筆と硯を運び込ませ、その実力を測ろうとしました。私は進み出て応えました。『遠来の者で礼節をわきまえておりません。拙作をご披露させていただき、御恩に報います。』七言律詩をその場で書き上げ渡しました。慶保はこれを見ると、私に、詩集一函と親筆の対聯、そして衣類などを褒美としてくださいました。これは台湾漂着の一端に過ぎません。とても、語り尽くすことはできません。」

石曰「台灣地方廣狭大小如何。」

楊曰「雖不能詳知、大概東西狭、南北長。比琉球差小。其地有二種。曰生蠻、曰熟蠻。其曰生蠻者、或不火食者、熟蠻者、漸習中國風俗。」

楊曰：「台灣去中国、不過二日水程、然中間有三十六島嶼、名彭湖嶼、走船甚艱。」

楊曰：「台灣地方気候極暖、冬景如春、草木常青、土地平坦、多田。某経過處、往々有廢壊城池、頽牆毀瓦、堆積成邱、土人指點、説道『林爽文者、曾竊據作亂者、嘗見城高池深、樓櫓雲構、不數歳、盡為焦土、聞之嘆息而去。』

[訳]

石塚「台湾という土地の広さはどれくらいでしょうか。」

楊「詳しくは存じませんが、おおよそ、東西に狭く、南北に長い土地で、面積は琉球より少し狭いようです。生蕃と熟蕃という二種類が住んでおり、生蕃は火を通さないものを食します。熟蕃は徐々に中国の風習を身につけました。」

楊「台湾と中国とは海路二日間に過ぎません。ただ、間には三十六の島々があって、澎湖島付近は操船がとりわけ難しいのです。」

楊「台湾の気候は、温暖で冬でも春のような温かさで、年中緑が絶えません。土地は平坦で田畑も多いのですが、私が通りかかった所では、時おり壊れた城壁や荒れた堀をみかけ、あちこちに瓦礫の山が築かれていました。土地の人がいうには、『林爽文[24]がここを不法に占拠して乱を起こしたせいです。以前は城壁と堀が整備され、楼閣が立ち並んだ美しい景色でしたが、わずか数年のうちに焦土と化してしまったのです。』そういうと、ため息をついて去っ

て行きました。」

⑤福州の琉球館での見聞［12葉3行目～17葉9行目］［筑波本　5葉　裏3行目～8葉　表5行目］

石曰「福州有琉球館、其垣墻周囲及門戸大小、比本地者何如。」曰「小一等耳。」

楊曰「福州港口曰五虎門、有一條大河、両岸相去、約半里許、我船到彼、可沂流、而直達琉球館門前。＜(割注) 館去海口二十里許＞　福州人家稠密、無有尺寸隙地、所謂車轂擊人眉摩、甚是熱鬧。剪径最多、走路少不留心[25]、輒為人偸物件、其伎可謂絶巧。土人不甚以為恠也。」

［訳］

石塚「福州の琉球館の敷地や建物の広さは、この薩摩の地の琉球館と比べてどれくらいの違いがありますか[26]。」楊「少し狭いだけです。」

楊「福州の港は五虎門と申します。大きな川があり、その川幅は半里ほどです。琉球の船がそこに着くとその流れに沿って琉球館の入り口に到達します。＜(割注) 琉球館から港まで二十里ほどの距離である＞　福州は人家が密集しており、立錐の余地もありません。それこそ車や人の往来が激しく、肩や顔にぶつかるのもしょっちゅうです。大変な賑わいですが。追剥が実に多いですし、道を歩いている時に少し油断すると、物をすられています。そのスリの技は実に大したものです。土民は何も不思議に思わないようですが。」

石曰「在福州曾見読書人聴其談論否。」曰：「見一二才子、文鳳不識官話、言語不通、書字通言、聞其大略耳。讀四書五經、用宋朝程朱注解、又旁及諸子百家之書、又学作文章、此天下皆同也。但聞今中國考試文章取士、故讀書者、專為擧業、作官計耳。當其考試考其文章、定其高下、取其中選者、或為秀才、或為進士、擧人等科目、中国為学、此其與我邦少有不同。」

［訳］

石塚「福州で読書人と談論する機会はありましたか。」楊「一人二人ばかり才子と会いました。私は官話ができませんので、話し言葉は通じません。筆談での応対で、おおよそのことをつかんだだけです。四書五経は、宋の程朱の注解により読みます。また諸子百家の書にも及びますし、更に自ら文章を作るために研鑽を積みます。この点は、どこも同じですね。ただ、今の中國では文章は官吏登用試験のためのものとなってしまい、読書は、自らの官を得るための手段となっているようです。試験では文章の良否を判定し、それによって官吏採用が決まります。合格者が、秀才、進士、挙人などとなるのです。中国の学のありようは、我が国とは少し違うようです。」

石曰「聞中國奉聖人教、上自天子下至庶人、無一人不学、至於詩文、必是人々會作」楊曰：

「不是*不是*[27]、何以験之、前年冊封使者来琉球時、從者五百人、其中能詩善文者、不過三五個人耳、由此看来、詩又亦是一大艱事。」

楊曰「福州琉球館與州城相去約一里許、其間都是人家、有萬壽橋。<(割注) 街名>毎琉人過此、兒童群集、而戯之。甚至以馬糞擲之。瑷河人、陳邦光者、舊年随使者到琉球、與文鳳有一面之交。于時邦光為教授、在萬壽橋。一日迎我等叙話、適會其家、有光学之宴、光学宴者、堂中掛孔夫子像、令門弟子皆拜、上香禮畢、開酒宴。是日邦光引五六十個門弟子、使文鳳相見、曰『此幾位在琉球博覧飽学、汝等請出題求詩文。』一人捧文房四寶至面前、即成七言律以呈衆、皆傳観之。又曰『若斯人而敢不敬乎』更痛責子弟平日無禮於琉人。」皆謝曰『後日不敢。』後日數十日、鳳等将帰國、在港口守風。福州存留官有信来説、『他日過萬壽街、毎苦兒童作恠。今則不然。問兒童曰『恐有中山楊先生過、所以不敢戯也。』可為一笑。」

[訳]

石塚「中国は聖人の教えを尊び、上は天子から下は庶民に至るまで、誰もが学び、詩文も作れない人はいないと伺っております。」楊「いいえ、とんでもない。何を証拠にそうおっしゃるのです。先年冊封使が琉球に来ましたが、従者五百人中、詩文を作ることのできたのは三四人に過ぎません。このことからわかるように、詩を作るのは非常に難しいのです。」

楊「福州琉球館は福州城から一里ほどの場所にあり、このあたりは人家が密集したところで、万寿橋<(割注) 街の名>という場所があります。琉球人がここを通るたびに、大勢の子供が騒ぎ立てからかいます。ひどい時には、馬糞を投げつける者さえおりました[28]。瑷河の人、陳邦光は、昨年使者に随行して琉球に来られたことがあり、私も一度お会いしました。この時は、陳邦光は教授として、万寿橋におられました。ある日、旧交を温めたいとのことで、私達はその御宅に招かれました。そこで光学の宴が開かれましたが、光学の宴とは、堂に孔子様の像を掛け、学生にお辞儀をさせ、香を献じる儀式で、その後酒宴を開きました。この日陳邦光は五六十人の弟子を呼び、私に会わせました。陳は『この方々は琉球きっての学者として知られている。詩を作っていただくために、題を述べなさい。』と学生に促しますと、一人が文房四寶を私の前に運び込みます。たちどころに七言律詩を書き上げて呈示すると、学生達は手渡しで次々に読みます。陳は『これだけの才能を具えた方に無礼なマネなどできるはずがないであろう』としかりつけ、日ごろ学生達が琉球人に非礼を重ねてきたことを責め立てました。学生は皆『以後は、二度といたしません』と詫びました。その後、数十日がたち、間もなく帰国という頃に、港で風待ちをしておりました頃、福州在留官より信書が届きました。『以前は万寿橋を通るたびに子供たちの悪戯に困らされたが、今や全く様子が違います。子供たちに聞くと『中山国の楊先生がお通りになるので、悪ふざけはできません。』と答えました。と、こんな笑えるようなことがありました。』

楊曰「蒋立中者、徽州人、與冊封使趙文楷同郷同志、文鳳本不相識。聞我到福州、先期數十日、

至福州以待、及鳳到、屢為来訪、極見厚待。蔣立中外祖父曰袁子才、曾為大学士、乃清朝聞人也。著書甚多、今行于世云。」

楊「蔣立中という人は、徽州の人で冊封使の趙文楷と同郷です。面識はありませんでしたが、私が福州に滞在することになると聞いて、私より数十日も早く福州にやってきて備えていたそうです。私が福州に到着してからは、度々琉球館を訪問され、手厚いもてなしを受けました。蔣立中の外祖父は、袁子才（袁枚）という大学士で、清朝でも著名な人です。多くの著作があり、今も世に広く知られています。」

［訳］

石曰「福州曾見婦女行路否。」曰「不見。凡婦女出門、必用轎子、故不可見面也。但寺廟焼香時、必於廟門外下轎歩走、方露其面。」

楊曰：「今清朝甚禁娼優、故無花街柳巷、然於海口或河下、舟舩輻輳等去處、有私窠子。」

楊曰：「鳳等在台灣、閲四個月、宮發船隻、載送至厦門。其地蠻舶輻輳。見旌旗揺曳、畫紅彩緑、其船大如山者。泊於巷内、有長石堤、至海心、名金門關、有一品武官領從兵卒、為守把。」

楊曰：「中國待遠人極其周全。鳳等船将歸、有官舶竪帥字旗、帯領四十餘隻小船、護送出之海口二十里外、以防海匪。」

［訳］

石塚「福州では女性が道行く姿を見かけましたか。」楊「見ていません。女性は必ず駕籠に乗って出かけるので、顔を見る機会は無いのです。ただ寺参りには駕籠を降りますので、その時だけは顔を見せます。」

楊「清朝は娼妓を禁じており、妓楼街はありません。ただし、港や川下に小船がギッシリと密集して停泊しており、こういう船に私娼がいるのです。」

楊「私達は臺灣で四か月ほどおりましたが、官船での迎えがあり厦門に送られました。厦門は外国船がひしめき、色とりどりの旗をはためかせ、山に見立てられるほどの大きな船もありました。港に停泊しましたが、港には石の堤が築かれ、堤は金門関まで続いています。そこには一品の武官が兵卒を率いて警備にあたっていました。」

楊「中国の遠来の客への接し方は至れり尽くせりです。私どもが帰国する時、『帥』字の旗を掲げた官船が四十一艘の小船を引き連れて、港から二十里ほど先まで護衛してくれました。海賊に襲われないように警護してくれたのです。」

⑥琉球国での最高官の選出方法［18葉1行目～3行目］［筑波本　8葉　表6行目～8行目］

石曰「貴國當擇國相時、使國人各自丢票、共相議。其票上書其名多者、挙之為國相、不知有之乎。」曰「有。然中古以前、不知如何、今擇相皆然。」

［訳］

石塚「貴国では最高官を決めるのに国民の投票[29]と話しあいによるそうですが、多くの票を

集めた人が最高官となるのでしょうか。」楊「そうです。中古以前の時期にはどのようにしていたか、わかりませんが、現在はこの方法によって選びます。」

⑦琉球における子弟教育［18葉3行目～19葉8行目］［筑波本　8葉　表9行目～9葉　表2行目］

石曰「貴國創建學校三年于茲、其設學本意何如」曰「琉球蕞爾小邦、創建学校、一則慕効上國高風、教國子弟、欲成人材、以厚風俗也。設学本意不過如是[30]、畢竟欲明人倫而已矣。」

石曰「学校教子弟讀書、用華音讀否」

楊曰「讀法依日本用鈎挑廻環、顛倒讀之、實字先讀、虚字後讀。但久米村亦有学校、多歴年所子弟皆學中國言語、讀書亦用華音、然日本讀法不廢也。國王命令及民家通用書柬等式、與日本不異。惟通中國書柬表文、一依中國書法。」

石曰「首里学校何名」曰「堂上扁曰：『崇儒重道』、國相尚周所書也、有山曰『虎山』。環赤平村、東達汀志良洲村、北達儀保村、學校在赤平村中。故名『虎館』、文鳳作學校記、掛在正堂壁上。」

［訳］

石塚「貴国では学校を設立されて三年経過したそうです[31]が、その設立の主旨は何でしょうか。」楊「琉球は小国に過ぎません。学校設立にあたって、まず、中国の学風に倣い、我が国の子弟を立派な人材に育てあげ、礼儀や習慣を尊ぶことが何よりです。建学の主旨はこれに尽きます。結局人の道を明らかにすることがその目的です。」

石塚「学校で子弟教育を行う際、読書は中国語音によりますか。」

楊「日本の方式に倣い、返り点を用い語順を顛倒させて読みます。まず実字から意味をとり、それから虚字により解釈を加えます。ただし久米村にも学校がありまして、子弟は皆中国語を学んでいます。読書には中国語音を用いますが、日本のような訓読の方式も残しています。琉球国王の命令や民間での日常の書簡などは、日本の書式と変わりません。ただし、中國あての書簡は中国の書式に一致させています。」

石塚「首里に設置された学校は何という名ですか。」楊「学校の扁額に『崇儒重道』とあり、これは最高官の尚周の手によるものですが、近くに『虎山』という山があって、赤平山を巡って東は汀志良洲村、北は儀保村にまで達するのですが、学校はこの赤平村にあるのです。こういうわけで、首里の学校は『虎館』というのです。私がこの学校の由来を記し、今は正堂の壁に掛けられています。」

⑧薩摩藩士との交流［19葉9行目～20葉頁9行目］［筑波本　9葉　表3行目～裏4行目］

楊曰「文鳳訪山本先生時、其家掛三對聯、戸外聯曰『千歳鶴降千歳樹、萬年人迎萬年客』。廳中聯曰：『嘉賓須傾三百盃、美酒新沽斗十千』。堂上聯曰『南海明珠光滿堂、東籬殘菊香浮盞』。

此聯句誰作。*似*為文鳳設[32]、何也。」曰「是為足下来訪、我先生特作此、以敬客」曰：「書之者為誰。書法遒勁、斌媚可人比中華能書者、恐不相上下。」曰：「書之者宮下希賢、其日面北坐第二位者也。」

會栖遲亭日、楊問曰「一老先生坐上頭者為誰。」曰「長谷川養、亦係本州學校教導官員。有足疾。不出門*養病於家。今日欲與足下相見、肩輿來會*)」

[訳]

楊「私が山本先生を訪ねた時、お屋敷には対聯が三つ掛かっていました。一つめは、扉の外側に掛けてあった『千歳鶴降千歳樹、萬年人迎萬年客』。客間には『嘉賓須傾三百盃、美酒新沽斗十千』が、広間には『南海明珠光滿堂、東籬殘菊香浮盞』が掛けてありました。これは誰がお書きになったものでしょう。どうも私のために準備されたように思うのですが。いかがでしょうか。」石塚「貴下をお招きするあたり、客人への敬意を表そうと私の恩師が筆をとったのです。」楊「どなたの手になるものでしょう。その筆致は雄渾かつ優美で、中國の能書家にも劣ることはないでしょう。」石塚「それを書いたのは宮下希賢という者で、あの日北向きの席で2番目に座っておりました。」

栖遲亭で薩摩の藩士達と会談した日に、楊はこう尋ねた。「上に座っている老先生がおられますが、どなたですか。」石塚「長谷川養と申しまして、私とおなじく薩摩藩の藩学で教員です。足が悪いため普段は外出せず、*家で療養しておりますが、今日は貴下とお会いするために、皆でここまで担いで参りました。*」

4 考察

まず、本資料中の主要人物の出来事と、関連事項を時系列にして示しておく。

	石塚崔高 1766-1817	嘉味田親雲上(ペーチン)経斎 楊文鳳 1747-1805	李鼎元 1749—1812	その他
1787年 天明7年	薩摩藩の稽古通事となる。			
1796年 寛政8年		琉球国恩謝使の一員として江戸に登る。		
1798年 寛政10年				首里に国学が創建される。
1799年 寛政11年 嘉慶4年				吉壽が台湾府知府となる。

1800年 寛政12年 嘉慶5年		李鼎元の信頼厚く、その命を受け、数名で中国語琉球語対訳語彙集『球雅』の編纂に着手[33]。	尚温王の冊封副使として5月12日から10月5日まで琉球に滞在。11月6日に北京に帰還。	
1802年 寛政14年 （この頃か）		那覇から福州に向かうも暴風のため台湾に漂着。再度出帆し、厦門経由にて、福州に到着。		
1803年 享和3年	石塚・楊の対話『琉館筆談』(ホーレー文庫　所蔵本)			
1806年 文化3年				楊文鳳の詩集『四知堂詩稿』、石塚が訓点を付して、薩摩藩より刊行される[34]
1807年 文化4年	昌平黌に派遣される			
1808年 文化5年				筑波大学本『琉館筆談』書写される

石塚と楊が語り合った内容は、ほぼ史実を映しているが、記憶違いからか、数年の誤差が生まれるのは已むをえないことであろう。例えば「舊年」という語が2度用いられるが、楊が台湾に漂着した年と、陳邦光が使者として来琉し面識をもった時期が同じ年であるとは思われず、前者の「舊年」は<昨年>と解釈し、後者は<先年>と解釈せざるを得なかった。首里での国学開校の経過年数が合わないなどの不具合も見せるが、薩摩での会談の時期を更に遡らせるに足るほど大きな根拠になるとも思われない。

なお、琉球使節との対話により情報を記録した資料として、薩摩藩士・赤崎楨幹により整理された『琉客談記』がよく知られている。寛政8年の琉球謝恩使で鄭章観、蔡邦錦から情報を収集したもので、楊文鳳も随行していた使節である。島津重豪は自ら唐話を駆使して使者と対話を行ったとされ、赤崎は筆談ではなく薩摩藩の唐通事を介して聞きとった内容を、日本語で記したとされる。なお、琉球側の二名について、真栄平2007により補足すると、鄭章観は1786年に福州の存留通事を務め、1790年には都通事として北京に赴いている。蔡邦錦は日本来訪の時期よりも遅くなるが、1800年には都通事として北京の地を踏んでいる。二名とも通

事として十分な能力を備えた人物であるといえよう。『琉館筆譚』の内容から楊の語学力は、この二名よりは劣っていたと思われる。彼の詩才が高く評価され中国側から厚遇を得たことが、しばしば本資料内で語られる。

石塚は『琉客談記』の内容を熟知した上で対談に臨んだものと推測される。石塚が楊から聞き出した情報は、通事としての関心から、冊封使とのコミュニケーションが口頭によって可能であったかという点や、台湾漂着という最新の事件、琉球首里の子弟教育などに重点が置かれている。

ではこの資料は、果たして筆談をまとめたものであろうか。それとも口頭での対話を文字に直したものであろうか。楊に鄭章観、蔡邦錦に匹敵する語学力があるとすれば、口頭でのコミュニケーションを主としたと思われる。楊は台湾、福州で筆談を用い、文言文や詩文の巧みさで賞賛されてきた人物である。とはいえ、石塚と楊が、口頭によらず、筆談しか用いなかったとの断言はできかねる。石塚は日頃鍛錬した唐話での対話を試みたかもしれない。口頭での対話がスムーズにいかず、筆談に換えたとしても、その筆談の文体が文言文を主としていたとの根拠もない。もう一度、翻字部分において、下線を付した箇所に着目されたい。冒頭の挨拶部分には口語語彙の混入は見られないが、エピソードが生き生きと語られる台湾漂着の件では、他人のセリフを引用した箇所が多く、口語の混入が際立っている。むしろ石塚からの問いは、定式化した表現が多く、口語語彙は少ないのである。本資料に残る楊の返答が、楊自身の筆記を直接写したものとの確証はない。一つの可能性として、筆談を記録として整理しなおした石塚によって、白話小説の一節を思わせるような文体に一部が改められたとの見方を提出しておく。

語彙以外に語法の面でも以下の三点が指摘できる。

・動詞「有」が、「天使有帯来花箋長二丈余」のように動詞の前に用いられる。この点は、福建語の影響下にある琉球官話の特徴と一致する[35]。

・構造助詞「的」が使用される。「今日方見文字値錢的」の例で見られるように、文言文ではありえない虚詞が用いられている。

・「在」が動詞の後に位置し、補語として用いられる。例「台灣贈答詩載在別冊」「掛在正堂壁上」

以上、初歩的な考察をおこなってきたが、語られる内容に応じて、本資料中の口頭語彙・語法の混入の多寡には変化がある。口語と文言のどちらにも親しんでいた石塚にとっては、情報収集という任務のほかに、書き残す楽しさもあったのではないか。後に、楊文鳳の詩集『四知堂詩稿』が、薩摩藩から刊行されるが、石塚の訓点と校正によるものである。通事の職を全うし口語での意思疎通を生業としてきた者の自負と、文言の世界で展開される詩文の豊かさを味わい、儒者としての矜持を保った石塚がいなければ、『琉館筆譚』『四知堂詩稿』の両者を我々が今見ることは無かったのである。

【注】

1）石塚の事績については、徳永 2005　pp. 434-436 に詳しい。

2）横山 1987　pp. 505-506 によれば、楊文鳳は寛政 8 年（1796 年）の琉球謝恩使 97 名の中に含まれており、序列は 97 名中 17 番という地位にある。役割は「楽師」という扱いであった。同書 p. 379 には日程が記され、琉球出発は 7 月 13 日、江戸到着は 11 月 25 日、琉球への帰着は翌年 4 月 6 日で、往復ともに薩摩での一カ月程度の滞在期間がある。実は石塚との接点は寛政 8、9 年のこの時期にあっても不思議ではない。しかし後述するが『琉館筆譚』の内容には、首里の学校創設や楊の台湾漂着、冊封使李鼎元とのエピソードが含まれるため、これらの実現後の対話であることは確かである。『琉館筆譚』は冒頭に享和 3 年に石塚と楊が薩摩琉球館において対面し、挨拶を交わした件を載せている。ついでながら、ホーレー文庫の複製本のうち一部は琉球大学の郷土資料室・仲原善忠文庫にも所蔵され、『琉館筆譚』には、「享和 3 年（1803 年）に鹿児島の旅館で石塚崔高の訪問を受けた時の対談である。」との解説が仲原善忠により加えられている。

3）「以誌奇遇於後日」　筑波本は「於」字を欠く。

4）原文は、「石崔高」とし、「塚」の字を欠く。琉球側は、中国名を名乗る風習がある。例えば、嘉味田親雲上（ペーチン）経斎は楊文鳳と名乗る。これにならい、「石塚」ではなく「石」としたものであろうか。

5）薩摩藩の琉球館については、『沖縄県史　各論編 4　近世』「第五部第三章　鹿児島琉球館をめぐる状況」pp. 491-pp. 516 に記述がある。使節の滞在場所という機能にとどまらず、首里王府による治外法権的貿易拠点としての機能を備えていたとの説がある。深瀬 2003 を参照されたい。また、福州琉球館については、『沖縄県史　各論編 4　近世』「第五部第二章　福州琉球館をめぐる状況」pp. 465-490 を参照されたい。

6）『四知堂詩稿』を指す。

7）「特」ホーレー文庫本は、「時」とするが、頭注で「特」に訂正する。筑波本も「特」とする。

8）「字」ホーレー文庫本は「守」とするが、頭注で「字」に修正。筑波本も「字」とする。

9）原文の「前年」は、<おととし>、<昨年>の意味とは解しがたいので、<先年>の訳を与える。その理由は今回の使節の来琉時期は、1800 年で、楊と石塚の薩摩での面会は、この数年後の 1803 年とみなされるからである。

10）正使の趙文楷（1761 年-1808 年）は、1796 年の状元。副使の李鼎元（1749 年-1812 年）は 1778 年の進士。著書に『使琉球記』六巻があり、海路の苦労、琉球滞在中の事績が書き残され、楊文鳳との交流も頻繁に登場する。寄塵は書画に秀でた僧侶で八九山人、衡山人とも称する。使節に同行し琉球に渡るが、福建への帰路、船中で歿する。

11）臨海寺はもともと、那覇の西側の海に突き出た堤防と浮島のある場所に位置していた。四方を海に囲まれた地勢から、異国人の一時的逗留場所として使用されることもあった。冊封使が到着した直後に、首里での正式な拝礼の儀式の前に、滞在していたものと推測される。なお現在は埋め立てられ、臨海寺は別の地に再建されている。

12）琉球側が、頭を地に打ちつけてこする叩頭の礼を行ったのに対し、使節側はこれよりも軽い礼である「作揖」で返したことを述べる。

13）李の滞琉当時の年齢、及び楊と李の年齢差には、誤りが含まれていると思われる。

14）「救命」ホーレー文庫本は「勅命」であったが、頭注で「救命」に修正。

15）「衆人笑」筑波本は「衆人皆笑」とする。

16）「争先」ホーレー文庫本は「児」とするが、頭注で「争先」に修正。

17）「謝鴻恩」ホーレー文庫本は「思」とするが、頭注で「恩」に修正。

18）「賦詩」ホーレー文庫本は「詩賦」とするが、筑波本に従い「賦詩」とする。

19）「一章」ホーレー文庫本は「二章」とするが、頭注で「一章」に修正。

20）「大守」ホーレー文庫本、筑波本のいずれも「大守」とするが、「太守」の誤りであろう。

21）「問」ホーレー文庫本は「間」とするが、頭注で「問」に修正。

22）吉壽は 1799 年（嘉慶 4 年）に台湾府知府となる。

23）慶保は 1801 年（嘉慶 6 年）に按察使を拝命して台湾を巡察した。翌年 1802 年（嘉慶 7 年）に台湾府

知府代理となる。

24）林爽文　福建漳州府出身。1786年（乾隆51年）に台湾で挙兵し一時全島を征圧するも、1788年鎮圧される。

25）原文「走路少不留心」の「少」は「稍」の誤りであろう。以下にも同様の誤記が1か所ある。

26）清代の福州琉球館は、老朽化や台風洪水の被害ため、たびたび大規模改修が行われている。深澤 2011 pp. 66-87に詳しい。楊の滞福州の時期には、修復工事中ではなかった可能性がある。

27）「不是不是」筑波本は、不是を2回重ねる。

28）福建琉球館に滞在する琉球人が、地元の子供たちの悪戯で悩まされたというエピソードは、琉球で使用された官話教科書『学官話』にも見える。瀬戸口 2003　pp. 99-100を参照のこと。

29）原文の「国相」「丟票」について説明を加える。最高幹部である「三司官」の選出方法についての質問である。「三司官」は「親方」の中から投票で三名が選出され、選挙権は、王族、上級氏族ら二百余名に与えられていた。

30）「如是」ホーレー文庫本は「児」とするが、頭注で「如是」に改める。

31）喜舎場 1993 pp. 647-673によると、享保3年（1718年）久米村の子弟に対して、経学・詩文・官話などが教授される明倫堂を設立していた。また、寛政10年（1798年）には首里に国学が創建され、家格を有する子弟も一般子庶の子弟も入学を許されたという。本資料における学校とは、後者を指すものであろう。首里の国学開校から3年経過するというこの記述によると1801年頃の対話となり、石塚・楊の薩摩での対話を享和3年（1803年）とする説とは齟齬をきたすが、ここでは、深入りしない。

32）ホーレー文庫本は、「似」字を欠く。

33）丁鋒 1998は『球雅』が『琉球譯』という書名で北京図書館に所蔵されていることを指摘し、翻字により内容を紹介している。

34）高津 2010 p. 158は、『四知堂詩稿』（独立行政法人国立公文書館所蔵本）の刊記に、「薩州書房　児玉利兵衛/大阪書房　泉本八兵衛樫本勘兵衛」とあるも、具体的な出版は大坂で行われたと推測している。

35）ちなみに、石塚が編纂に関わった『南山俗語考』には「有+～（述語）」は「有見它」（巻2・1葉）、「有慢你」（巻2・2葉）、「有労你」（巻3・17葉）の3箇所にみえる。ただし、福建語の直接的な影響であるか否かの判断は、『南山俗語考』の収録語彙全般の検討の上で下すべきことであり、本稿では判断を保留しておく。

【参考文献】

喜舎場一隆 1993「琉球における唐通事」『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会 pp. 647-673

財団法人沖縄県文化振興会 2005『沖縄県史 各論編　第4巻　近世』沖縄県教育委員会

高津孝 2010「琉球の出版文化―海を越えた出版文化圏」『博物学と書物の東アジア―薩摩・琉球と海域交流―』pp. 137-159 榕樹書林

丁鋒 1998『球雅集　漢語論稿及琉漢対音新資料』好文出版

徳永和喜 2005「薩摩藩の唐通事」『薩摩藩対外交渉史の研究』九州大学出版会　pp. 411-446

深澤秋人 2011「清代における福州琉球館」『近世琉球中国交流史の研究―居留地・組織体・海域―』pp. 66-91 榕樹書林

深瀬公一郎 2003「近世日琉通交関係における鹿児島琉球館」『早稲田大学文学研究科紀要』48-4　pp. 45-56

真栄平房昭 1997「清国を訪れた琉球使節の見聞録―『琉客談記』を中心に―」『第八回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』pp. 123-142　沖縄県教育委員会

武藤長平 1926a「清朝人の琉球観」pp. 365-385 『西南文運史論』岡書院（1978　同朋舎　復刻版）

武藤長平 1926b「張學禮著『使琉球記』と李鼎元『使琉球記』」pp. 397-400　同上

瀬戸口律子 2003『学官話全訳　琉球官話課本研究』榕樹書林

横山學 1987『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館

李鼎元（原田禹雄訳注）2007『使琉球記』（改訳新版）榕樹書林

【2012年9月6日受付，10月31日受理】

The Translation and Annotations on Ryukan hittan

IWAMOTO Mari

论文提要:本文拟介绍《琉馆笔谭》,目的在于弄清江户时代日本薩摩藩通事与琉球官方交流的具体情况。薩摩藩要通过与琉球使者的交流得到了当时琉球与清国的最新情况。从《琉馆笔谭》的记录还了解到琉球是如何接待清国冊封使,以及琉球人在福建的生活情况。本文首先对现存的两个抄本,即夏威夷大学宝玲文库抄本与筑波大学所藏的抄本进行对比,把它们编为活字本,然后加上一些注释并翻译成日文。薩摩藩通事石冢崔高与琉球官员杨文凤之间,到底是只用笔来交流的,还是也有一些口头上的交流呢?本文拟依据《琉馆笔谭》语体上的特点对上述问题进行初步分析。《琉馆笔谭》中含有大量的白话词汇,笔者认为这可能是由于石冢通事将双方的交流编辑成一篇半文半白的语体。